

# 松木先生を懐う

長谷川 義 浩

松木先生の忘れられない最後の思い出は、一昨年七月に帰寂した小拙高遠蓮華寺の前任長谷川義敬聖人の本葬の日に出版した「日養聖人余香」に戴せた先生の「長谷川（旧姓泉）君の顔を憶す」の追懐の文である。

先生と泉義敬上人とは一級違いであったが、共に身延山法主日慈聖人の隨身生として給仕した。卒業后二人共選ばれて祖山学院より内地留学生として日本橋身延別院に起居を共にした仲であった。小生によくその頃の話をして下さった。

そして友を思うその文が先生にとって絶筆であると思う。

余香の原稿をお願いに参上した九月末日には、先生もお元気がなく、それでも君のお父さんの泉君のことならと引受けて頂いたのである。

今にして思へば無理をして書いていたゞいたことであつたと思う。誠に有難く感謝の言葉もない有様である。

今一つ先生と言えはすぐ思い出されるのは酒に關してのことである。

先生の酒はいつまでも同じような態度で飲みほされることである。

昭和二十八年のことである身延山大学の教職員旅行を箱根に設けた夜であつた。

全員飲み倒れてしまった後も、徹宵態度乱れず飲み続けていられたのは今は亡き塩田博士と松木先生のお二人であった。酒を好まれ酒をよく飲まれたお二方の先生である。

その後折にふれ酒の飲み方を教はり一諸に飲んだ思い出は教尽きない。

先生は小生にとっては身延山専門学校時代の恩師である。天台四教儀と布教法を習学した。

肝心の布教についてもっと多く習得すべきであったと悔まれる。

(本学教授)

## 生涯を子弟の教育に

上 田 本 昌

身延山にとってながい間の念願であった大学の新校舎が、ようやく完成し、明日十月一日はその落成式をおこなうという前日、同窓会の有志大会が、新装なった二階の教室で開かれた。

この日、学頭でありまた同窓会の会長でもあった松木本興先生はやや不自由になられた足を、さして気にもとめられず、元気なお姿をみせられ、全国各地から登山してこられた同窓の各師や、教え子の方々と歓談され、心から新校舎の完成を喜んでおられた。

松木先生は学頭になられる以前から、なんとかして大学の校舎を新しく立派な設備の整ったものにしようと、なが